

註

- 1) 山本暉久「石棒」『縄文文化の研究』9, 1983
- 2) 谷口一夫「上石田遺跡」甲府市教育委員会 1973

第4節 三角墳形土製品について

1号住居址の奥壁から出土した三角墳形土製品は、側面正三角形で無文である。その出土状況は奥壁の東側隅で、大きな敷石上に倒置された深鉢形土器と並んで出土し、さらに敷石の傍らに丸石を伴うというものである。

山梨の三角墳形土製品の類例⁽¹⁾は、本例と上の平遺跡（中道町）、川又南遺跡（須玉町）の3例である。小林氏⁽²⁾、小島氏⁽³⁾の集成段階では、山梨の出土例は報告がなされていなかったのであり、山梨は空白地域となっていた。

上の平遺跡のものは、側面二等辺三角形で文様は沈線による区画文と渦巻文を施したものである。遺構出土ではないが周囲の土器などから曾利式期とされている。また川又南遺跡のものは、側面は3辺が反っていて、5面の全てに渦巻文が施されている。同じく遺構に伴うものではないが、後期初頭の土器の散布が顕著であったという。

1号住居址の三角墳形土製品は、無文ではあるが遺構からの出土であり、しかも石棒・丸石などの祭祀的性格の強い遺物と共に伴していることから、資料的に重要であることが指摘できる。時期としては敷石住居址や出土土器から中期後半でも最終末と考えられるものである。

山梨の三角墳形土製品は、3例とも一般にいわれるところの盛行期としての中期後半から後期初頭に所属するものといえよう。

1号住居址の壁際からの出土は、富山県北代遺跡や石川県笠舞遺跡でも報告されているところであり、注意すべき出土位置であろう。さらに福島県山王館遺跡からは、土壙内の屈葬遺骸に伴って発掘されたという報告がある。従来からいわれている孔に紐を通して用いたという使用法など、三角墳形土製品をめぐる問題は多い。

分布からみても偏在性をもつ三角墳形土製品は、その全国例としても70数例であり、土偶や石棒などとの比較ではきわめて少ないものである。今後とも類例の増加に伴い、その性格などについて究明されることを期待したい。

註

- 1) 山梨の三角墳形土製品の数例は、方形周溝墓群で知られた上の平遺跡のうち、縄文の一括資料の1つとし出土したものである。担当者の小林広和氏より資料提供および教示を得た。さらに川又南遺跡の資料は、山路恭之助氏より提供を受けた。これらの資料については、山梨県埋蔵文化センターの「紀要3」1987に発表予定である。
- 2) 小林康男「三角墳形土製品考」『長野県考古学会誌』37, 1980
- 3) 小島俊彰「三角墳形土製品」『縄文文化の研究』9, 1983